

# シェリングと無世界論

—— 『自由論』序論部におけるスピノザ観への一評注 ——

平尾昌宏

Schelling and Acosmism. Spinozism-interpretation in "Freiheitsschrift"

HIRAO Masahiro

## Abstract

Schelling examines various definitions of pantheism in his "Freiheitsschrift". One of them is the definition of pantheism as the denial of finite things. Schelling insists that this definition does not adapt to pantheism and spinozism, offering the possibility of the unique interpretation of Spinozism, by identifying finite things in Spinoza's philosophy and the monades of Leibniz.

The uniqueness of this interpretation stands out in the history of interpretation of Spinozism in Germany. Hegel and Maimon define spinozism as acosmism, which is the interpretation rejected by Schelling in "Freiheitsschrift". Schelling does not refer the term 'acosmism', but many thinkers, for example Platner, Mendelssohn and Wolf, consider Spinozism as acosmism, or the system affirming only one substance and denying finite things or the world, without using the name of 'acosmism'.

We point out that, at first, it is important to acknowledge that Schelling rejects the acosmism-interpretation of spinozism but catches Spinoza's Philosophy in relating to that of Leibniz, since Maimon, Platner, Mendelssohn and Wolf also interpret Spinoza in relation to Leibniz,. But it must be questioned the reason why Schelling rejects the acosmism-interpretation of spinozism. The answer is in the fundamental framework of "Freiheitsschrift" in which Schelling aims integrating idealism and realism. For him, the representative

---

平成20年10月30日 原稿受理  
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

idealism is that of Fichte's 'Wissenschaftslehre', and the typical realism is the philosophy of Spinoza. Spinozism, therefore, must be just realism, for Schelling, to be integrated to the 'real-idealism' by himself.

## 前書き

本稿はシェリングの『人間的自由の本質及びそれと関わる諸対象の哲学的探究』、いわゆる『自由論』に関する一連の論考<sup>1)</sup>中の一ピースである。

前稿<sup>2)</sup>では、『自由論』のいわゆる序論部分(§ 1-10)の大枠をスピノザ主義との関係から整理し、それをヤコービとの対峙において描き出すという方法を採用した。そこで扱われたのは飽くまで大枠であって、とりわけシェリングとスピノザ主義との関係については踏み込んだ議論は行われていない。本稿はその点の欠を補いながら、小さな窓からではあるが、『自由論』全体でのシェリングのスピノザ及びスピノザ主義に対する基本的な姿勢を遠望することを試みる。

前稿でわれわれは、『自由論』冒頭の示唆に従って、序論部分を大きく二つに区分した。一つには「体系」の問題——正確には、自由との関係における「体系」の問題——を扱う前半部分(§ 1-6)と、その上で「自由」の問題——同じく、体系との関係における「自由」の問題——を扱う後半部分(§ 7-10)にである。後半ではスピノザ主義が全てを「物」と見なす一面的=実在論的体系であるとする批判が提示され、スピノザ主義の力動化、観念論化の必要性が主張される<sup>3)</sup>。そこから、実在論とフィヒテに代表される観念論との融合という課題が示されて、序論部は閉じられる。

一方、前半部分では汎神論の様々な規定を検討しつつ、シェリングは独自の内在の立場を見出している。この部分が、汎神論論争以来の思想的課題を引き受けたものであるのは明らかで、とりわけヤコービとの「対話」を通して、思想史的な厚みを示している。

そこで主題的に扱われている汎神論についてシェリングは、名よりもその内実が重要であるとして、一般に行われている種々の汎神論観を取り上げて批判して行く。一般的な通念では汎神論とスピノザの名とが堅く結びついているため、シェリングもそれらの諸規定を検討する度ごとにスピノザに言及することになる。しかし、このうち、最も本格的にスピノザを取り上げるのは第四段落である。そのため本稿もこの点に議論を集中させる。ま

1) その基本的な方針は平尾 [2006] で示した。

2) 平尾 [2007b] を参照されたい。

3) この点は別稿を準備している。

ずは(1)この部分の概要を取り出し、次に、(2)ここに流れ込んでいる思想史的水脈を辿る中から、(3)『自由論』におけるシェリングの対スピノザ態度の意味を明らかにする。

## 1 個別を否定する汎神論

シェリングが本論に先立って汎神論について詳しく論じなければならなかったのは、一種の自己防衛のためである。ヤコービや、この時代既にカトリックに転向していたシュレーゲルたちは、シェリング哲学をスピノザ主義、汎神論であるとみなし、批判を投げかけていた<sup>4)</sup>。彼らは理性=体系の外部を認め、すなわち二元論の立場を取る。それに対してシェリングは、少なくとも『自由論』においては飽くまで一元論の立場を取り、汎神論もしくは内在の立場を貫こうとする。そのためシェリングはここで、「汎神論」がヤコービらの批判するようなものではないこと、同時に、スピノザ主義もまた彼らの批判するようなものではないこと、そしてまた、しかし、シェリング自身の自説とスピノザ主義とが決定的に異なることを示さねばならなかった。

シェリングは、「汎神論」と呼ばれるものについての人々の捉え方を整理して、種々の解釈を提示している。1)宿命論としての汎神論、2)万物=神の汎神論<sup>5)</sup>、3)個別性の否定としての汎神論、4)自由の否定としての汎神論、である。シェリングはこれらの見解を一つずつ否定し論駁してゆき、また、それらがスピノザ主義に当てはまらないことを示そうとする。そして、1)と2)を批判した後の第四段落では、これらの見解が駁論されたとすれば、汎神論批判者たちは、3)の見解を持ち出すだろうとして、次のように述べている。

「だが、と上述の主張の擁護者たちは今や言うだろう。そもそも汎神論において問題になっているのは、神が万物であるということではなく(……)、諸事物が無であること、この体系があらゆる個別性を廃する、ということなのだ。」(Schelling-W, Bd. VII, S. 343)

これは、汎神論についての規定であって、スピノザ主義についてのものではない。むしろ、この時代にあっては汎神論と言えばスピノザ主義だと目されており、シェリングもそれを承知であるが、シェリングは、この解釈を、汎神論についても、かつまたスピノザ主

---

4) この点は後述する。

5) ハイデガーの整理では、シェリングはここで「神=万物」という解釈と「個物=神」という二つの見方を提示している。Heidegger[1971]=ハイデガー [1999]。なおこの序論部の構成については、渡邊[1980]がハイデガーの見方も含め整理した形で示しており、参考になった。

義についても退けるのである。

まず汎神論をこのように理解するなら、それは「神と万物の混同」という汎神論の規定と矛盾する。「なぜなら、もし万物が無であるなら、神とそれらをどうして混同することができようか。その場合、至る所純粹で曇りのない神性以外に何もものもないのであるから」(Schelling-W, Bd. VII, S. 344)。従ってそれは「汎神論」ではない<sup>6)</sup>。「そうでなくて、もし神の他に(単に神の外にではなく、神の他にも(nicht bloss extra, sondern auch praeter Deum))何もないのであれば、神が万物であるというのは単なる言葉の上だけのことになり、その結果、従ってその概念全体自体が解消され、無へと飛び去ってしまうように見える」。この意味でも「汎神論」は成立しない。

従って、明示的に語られてはいないが、シュリングの考えでは、「汎神論」とは、神と万物ないし世界との区別を暗黙の内に前提しているものであるということになる。それはそもそも自己矛盾的な概念であることになる。『自由論』本論部はこの「矛盾」の解消を目指す。ひとまずここで重要なのは、「神の他に、神の外に」、端的に言って「外」ということの意味である。スピノザでは、シュリングがわざわざラテン語を用いているこの「神の他に(praeter Deum)」は、例えば次のように用いられている。

「神の他にはいかなる実体も存在し得ず、知覚され得ない。(Praeter Deum nulla dari neque concipi potest substantia.)」(『エチカ』第一部定理14)

これは、粗雑に見ればあたかも「神の他には何もない」と言われているかに見える。しかし、スピノザが言うのは、「神の他には<実体>はない」ということである。別な箇所でのこの「その他に(praeter)」が用いられている箇所を見れば「実体とその変容の他には」(同定理4証明, 定理6系), 「実体と様態の他には」(同定理15証明)といった箇所が見出される。従って、この点を捉えて敢えて言うならば、スピノザにおいては「神の他に」変容ないし様態が存在するということになる。

しかし、スピノザの言葉には、それとは反対の文脈で読める文言もある。

「神の他にはいかなる実体も存在せず、考えられ得ない(定理14により)、すなわち(定義3により)、それ自身において存在し、それ自身によって考えられる実体は、神の他には存在しない。一方、様態は実体なしには存在出来ず、考えられもしない。」(同定理15証明)。

同じ内容を反復することになるが、神の他には実体はない。確かに、敢えて言うならば、神の他には様態があると言うことは出来る。しかし、その様態は実のところ実体の様態であって、実体なしには存在し得ない。従って、すべては唯一実体たる神に帰することになる。

---

6) 西谷はこの後に「それでは汎神論とも言えない」と訳文を補っている。

既に前稿で論じたように、ヤコービのスピノザ解釈はまさしくこうしたものであった<sup>7)</sup>。

しかしシェリングはこうした解釈を退け、別な読みを、あるいは別な読解の可能性を示そうとする。

シェリングは、この規定は汎神論と言えないばかりか、スピノザにも当てはまらないと言う。なぜなら、スピノザ主義に関するシェリングの理解によれば、スピノザにおける万物としての「様態」という「概念はむしろ純粋に消極的なものであって、なんら本質的なもの積極的なものを表現していない。しかし、それはまた、さしあたっては単に事物の神に対する関係を規定するのに役立つだけであって、それら事物がそれ自体で考えられた場合に何であるかを規定するのに役立つものではない」(Schelling-W, Bd. VII, S. 344)からである。つまり、スピノザの様態は「実体の様態」としては実体と不可分であるものの、「様態」を「それ自体として」見るなら、それは別様に理解し得る、というのである。

このようにシェリングは微妙な言い回しをしているが、決定的に重要なのはこの後である。以上のようにシェリングは、スピノザにおける個物が「様態」として見れば積極的でないことは認めるが、その上で、スピノザにとって「個別の存在者は実体の変容すなわち帰結の一つとして考察された実体そのものである」——と解し得る——として、無限な実体をAとし、その帰結をA/aとすれば、 $A=A/a$ とはならず、A/aは「(たとえAの帰結であっても)ある固有の特殊な実体でないことにはならない」と、たとえスピノザがそう言っていないなくても、そう解釈し得るし、この解釈はスピノザ主義と両立不可能ではないと主張する。「というのは、先ほどの表現で言うA/aと全く同じものであるライプニッツのモナドが、スピノザ主義に反対する決定的な手段ではないということを、人はもう認めているのであるから」(Schelling-W, Bd. VII, S. 345)。シェリングはスピノザ主義とモナドロロジーの類似性については、それをあたかも既定の事実のようにして語り、何も付け加えていないが、ブフハイムの言うように<sup>8)</sup>、時代的に近いところでは、例えばヤコービが『スピノザ書簡』において述べていたことを念頭においているように思われる<sup>9)</sup>。つまりシェリングは、ヤコービ的なスピノザ解釈を否定するために、わざわざヤコービのスピノザ解釈の別な一点を持ち出すのである。

こうしてシェリングは、いわばスピノザ主義をモナド論的に解釈することによって、スピノザ主義を救い出そうとしている。しかし何からなのか。ここでは名付けられることのないそれを、われわれは「無世界論」と呼んでいるのではないだろうか。

7) 平尾昌宏 [2007b] を参照。

8) Buchheim [1997], S. 99.

9) この点は後に検討する。

## 2 無世界論の系譜

「無世界論 (Akosmismus)<sup>10)</sup>」の語は、周知のように、『エンチュクロペディー』と『哲学史講義』でヘーゲルが、スピノザ主義を特徴づけるのに用いたものである。『哲学史講義』ではスピノザ哲学の主要特徴三点のうちの第一の点として取り上げられている<sup>11)</sup>。ヘーゲルは、一般に無神論とされるスピノザが、実は無世界論だと言う (Hegel-W, Bd. XX, S. 162-3)。ヘーゲルによるこの規定は徹底した否定であるように見えて、実は返す刀で、スピノザの反対者たちは、実は「神を問題としておらず、有限者ないし自分自身を問題としている」に過ぎない、と言う。つまり、ヘーゲルがここで何よりも批判しているのは、妥協的な有神論、神学の立場であり、「スピノザ=無世界論」説は、一種スピノザ擁護の趣すら持っている。なぜなら、「無世界論」とは、逆に言えば、神という存在の唯一性、統一性の肯定を明確に述べたものでもあるからである。

基本的な論点は、「スピノザ=無世界論」説を述べたもう一つの主要テキスト、『エンチュクロペディー』573節においても変化はない。更に、この二つの主要箇所他に、関連する論点が見られるのは『宗教哲学講義』である。この『講義』では、種々の神概念、宗教形態がヘーゲル流の位階に従って順々に考察されているが、スピノザに触れた最も主要な箇所は汎神論を取り上げた箇所である。汎神論とされるもの、すなわちインドの宗教、エレア派の哲学、スピノザ主義は、実は無神論ではなく、有限な事物の実在性を認めない考え方であるとされ、更にはそれが各所で反復されている (Hegel-W, Bd. XVI, S. 99, 317, Bd. XVII, 494, 499)<sup>12)</sup>。ここでは「無世界論」の語は用いられていないが、これが内容的には「スピノザ=無世界論」説の開陳であることは明らかである。つまり、世界を否定するものとしての無世界論とは、有限性、個性の否定なのである。

ヘーゲルの「スピノザ主義=無世界論」説はそれ自体が興味深い問題である<sup>13)</sup>。しかし、われわれにとってこれは、ヘーゲル独自の主張とはならない。われわれは既に、『自由論』

10) Akosmismusは「無宇宙論」とも「無世界論」とも訳されるが、ここで「無世界論」という訳語を採用したのは、より一般的ではないかと思われたからである。

11) 藤田訳では141頁以下に相当する。ヘーゲルの哲学史講義のテキスト問題については新たに研究が進んでいるが、ここではその詳細は割愛する。

12) 『エンチュクロペディー』にもテキスト問題はあるが、この部分 (Hegel-GW, Bd. XIX, S. 66-67, Bd. XX, S. 89) に関しては大きな問題はない。煩瑣の回避と利便性を考えて Hegel-W で出典を示す。

13) この点は別稿A (脱稿済未発表) に譲る (その概要は、2008年8月2日、シェリング・ゼミナール京都にて口頭発表を行った)。

にこの説のヴァリエーションを見出しているからである。ただ、ヘーゲルがこれをこの名で定式化し、スピノザに適用しているのに対して、シェリングはこの名を用いず、それをスピノザについて否定してもいるのではあったが、しかし、このように見ることでわれわれは、無世界論という捉え方をヘーゲルから解放するとともに、シェリングのスピノザ観を無世界論とリンクさせ、思想史的な脈絡を探る手がかりを得たことになる。

ここで問題は二つある。すなわち、一つは名としての「無世界論」の由来と、もう一つは、内実としての「スピノザ主義=無世界論」説の系譜が、それぞれヘーゲル、シェリング以外に見出せるかということである。従来、この問題は全くと言ってよいほど研究されて来なかった<sup>14)</sup>が、もしこれが可能であれば、『自由論』の、少なくとも第四段落から、一つの思想史的なパースペクティブを引き出し、逆に『自由論』をその文脈上に置く一つの手がかりを得たことになろう。そして、これは実際に可能なのである。詳しい調査内容は割愛せざるを得ない<sup>15)</sup>が、ここではその結論だけを取り出しておく。

まずはこの命名であるが、これはヘーゲルの他には、フィヒテに「無世界論者」の用例があり (Fichte-W, Bd. V, S. 269/Fichte-GA, Bd. I/6, S. 54)、またそれ以前には「無世界的な説」の用例がマイモンにある以外には発見できていない。また、フィヒテは該当箇所ですピノザに言及しておらず、「スピノザ主義=無世界論」説をこの命名とともに用いているのは、現在知られる限りでは、ヘーゲルとマイモンだけである。しかし、マイモンの主張は、彼の数奇な半生を綴った『自伝』中に挿話的に述べられたものに過ぎないもの<sup>16)</sup>、かなり明確な輪郭を持ったものである。そして、「無世界論」の命名が文献的にはマイモン以前に遡れない以上、問題は命名からその内実の見方へと移らざるを得ないが、その点でもマイモンは大きな示唆を与えてくれる。彼の説明を少し詳しく見てみよう。

マイモンの見方では、スピノザの「理説にあっては一こそが実在的であり、しかし多様性は単に観念的である。これに対して無神論の説においてはまさにその反対である」。それ故、「どうしたら人がスピノザ説を無神論とし得るか不可解である。両者は互いに正反対なのであるから。無神論においては神の存在が、しかしスピノザ説においては世界の存在が否定される。従ってそれは、むしろ無世界論的な説 (das akosmische System) と言わなければならない」(Maimon-W, Bd. I, S. 154)。

14) 実際、無世界論を主題とする単行著作、論文は見出せなかった。ただし、テキストの編注や研究の余録の形で様々な示唆があったこと、その点でわれわれの研究も従来の研究の蓄積に負っていることは明記しておかねばならない。

15) 以下、上記別稿Aを前提とする。

16) マイモンの、唯一邦訳のある著作（[小林訳]）だが、この箇所を含む15章は省かれている。

マイモンもまた、スピノザを無神論と見なす一般的な立場を拒否し、その点でスピノザへの共感を示している。それを有神論と対置する形で無世界論として提示するマイモンの主張は、後のヘーゲルの主張と軌を一にするわけである<sup>17)</sup>。しかし、われわれにとって重要なのは、マイモンとヘーゲルとの繋がりというよりは、むしろ、マイモン自身のスピノザ解釈の方向と、更にはヘーゲルには見られなかった思想史的な繋がりがマイモンでは明確になるということである。

第一にマイモン自身のスピノザ解釈の特徴を簡潔に取り出しておけば、それはスピノザ主義の観念論的解釈傾向<sup>18)</sup>である。マイモンにとってスピノザが無世界論者であるのは、スピノザにあっては世界の多様が現象に他ならず、つまり観念的なものであるからである。それを産出するのが無限な精神である。マイモンがカント的な超越論的観念論の基礎付けのためにスピノザに眼を付けたのは、スピノザの神をこの「無限な精神」として読み替えたからである<sup>19)</sup>。

思想史的な連関に関しても、贅言を省いて二点だけを取り出す。一つには、マイモンによるスピノザ主義=無世界論説が、一方では無神論というスピノザ非難との関係で、この非難からスピノザを擁護するかのようには語られているとともに、他方では、スピノザの見解をライプニッツとの関係において捉えていることである。上に引いた「無世界論」説提示の部分に直接続く部分でマイモンは、「ライプニッツ説は上述の両者の中間にある」と言う。「上述の両者」、すなわち「無世界論」と「無神論」である。マイモンの理解では、ライプニッツ説においては個別的なものの作用が認められ、同時にそれが一つの体系へと包摂されるという形を採る (Maimon-W, Bd. I, S. 154-5)。その意味でライプニッツ哲学は、神のみを認めるスピノザ的な無世界論と、世界のみを認める無神論とを総合し得るものである。この限りでは、マイモン自身の立場は、スピノザよりもむしろライプニッツに近いものであることになろう。この点でもマイモンは、無世界論と無神論を止揚しようとするヘーゲルの先駆となっている。

もう一つの点は、マイモン以前の、いわば「無世界論」との命名なしの「スピノザ主義=無世界論」説への示唆である。シェリングの場合もそうであったが、われわれの調査では、

17) 他にも両者の繋がりを示唆する点はあるが、割愛する。上記別稿で触れている。

18) こうした点については改めて論じなければならないが、マイモンによるスピノザの観念論的解釈については、今でもAtlas[1959]が参考になる。

19) この点で、Helfferich[1849]の見解は、受け容れられるものではないが、歴史的な意味で興味深い。ヘルフェリッヒはスピノザを極端な観念論とし、ライプニッツを实在論と解するのである。



こちらの例の方が遥かに例は多いのである。例えば、プラトナーの『哲学的アフォリズム集 (Philosophische Aphorismen)』である。1776年初版の977節への注解<sup>20)</sup>では、次のように述べられている。

「本来的には、スピノザが否定しているのは神性の存在ではなくして、世界の存在である。従って、彼の体系において神すなわち永遠で無限な存在以外に何ものも現実的ではないのである。」(S. 353)

これは、まさしくわれわれが見てきた「無世界論」の規定そのものである。しかし、プラトナーがこのように述べる背景を見たとき、われわれがそこに発見するのはやはりライプニッツであり、かつ、プラトナーがこの着想を得たのは、ここから更に遡ってメンデルスゾーンからであることが分かる (Platnar[1776], S. 355)。メンデルスゾーン、すなわち最初の著作『哲学的対話』でスピノザを批判しつつも、デカルトとライプニッツを繋ぐ枢要の位置に置き (Mendelssohn-S, Bd. I, S. 14/S. 349<sup>21)</sup>)、マイモンを庇護して彼とスピノザについて対話し、最後には親友レッシングのスピノザ主義疑惑を巡ってヤコービと論争したメンデルスゾーンである。マイモンがメンデルスゾーンからこの点で示唆を得ているのは確かである。

詳細は別に論じればよい。ここで取り出しておきたいのは、『哲学的対話』のメンデルスゾーンが、スピノザを哲学史における不可欠のステップであると見ながら、基本的にライプニッツ=ヴォルフ学派に依拠しつつ、スピノザにはモナドが、すなわち世界の多様が、神の外なる世界が欠如しているがゆえに、スピノザ哲学を半面の真理、神に関しては真でありながら、世界に関しては偽なる哲学と見なしたことである (Mendelssohn-S, Bd. I, S. 11 / S. 345.)。

われわれはここから更にヴォルフ、そしてライプニッツその人へと「無世界論」の系譜を遡ることもできる。詳論の暇はないが、メンデルスゾーンこそ、ライプニッツ、ヴォルフからプラトナーや、そしてマイモンへと繋がる経路地なのである。そして、マイモンによって「無世界論」の名を与えられ、これがヘーゲルへと伝えられる。

迂回が長くなった、シェリングに戻ろう。

---

20) 現在われわれにとって入手しやすいAetas Kantiana版は、1793年出版の、大幅に増補された第二版で、この部分は削除されるに至る。プラトナーが初版からどのように見方を変えたかも思想的に興味深い、この点も割愛する。上記別稿Aを待たたい。

21) 頁数はそれぞれ、初版と第二版のものである。

### 3 シェリングと無世界論の系譜

われわれは、1節で見たシェリングの議論を、前節で見た「スピノザ主義=無世界論」説の系譜上に置いてみたいと思う。紙幅の節約のために、次のように項目に整理し、あらかじめの注意を一つ(1)、本稿での議論からする結論を二つ(2, 3)、更なる展望を一点(4)述べることにする。

(1) まずは恐らく生じて来るであろう疑念に答えるために予め述べておくなら、シェリングがこの部分で「無世界論」という語を用いていないことは、シェリングのこの見解を「無世界論」説の系譜上に置くという見方の妨げにはならない。なぜなら、少なくとも現在までの調査では、スピノザ主義を「無世界論」の名で呼んでいるのは、ヘーゲル以前にはマイモンしか見つからず、しかし、実質的に同じ主張をしている哲学者たちは複数見出されるからである。この命名を用いずにスピノザ主義にとつては神のみが存在し、世界は存在しないと主張する見方を<無世界論>説と呼ぶなら、シェリングの議論をこの系譜上に置くこと十分に可能である。ヘーゲルやマイモンにおいて「世界」と呼ばれていたものが、有限な世界、個別性であったことを考えれば、シェリングが問題にしているのもまさしくそれであった。

(2) その上で、しかし、改めて結論と呼ぶのも憚れはするが、(2-a) シェリングのこの問題に対する考えが、他の哲学者たちとは異なって、スピノザは無世界論者ではない、というものであった点にシェリングの固有性を見出すことができる。

ただし、シェリングのこの理解は、(2-b) スピノザに即して見れば、必ずしも妥当ではない。とりわけ、スピノザの有限な個物を実体と呼ぶことは、概念上も内容上もスピノザにとつては認められるものではないからである。

しかし、(2-c) シェリングはここでスピノザの正確なテキスト読解を行おうとしているのではなく、むしろその可能性におけるスピノザ主義について考えている。それは、汎神論との批判を受けたシェリングが、自身の立場について反省する中で生まれてきた解釈、改釈である。

(3) そして、(3-a) こうした改釈を支えるのが、スピノザをライプニッツとの関係において見るという視点であった。有限様態をモナドに近いものとして理解し、スピノザ主義をライプニッツ主義と接合することでこうした改釈が成り立っている。(3-b) そして、スピノザ理解にあたってライプニッツとの関係を考慮するというこの大枠もまた、シェリングの考えを、「スピノザ主義=無世界論」説の系譜上で見ることを可能にしているポイントである。実際、スピノザ主義を無世界論と見なす議論のうち、ヘーゲルを除く全員がラ

イプニッツとの関係においてスピノザを捉えていたからである<sup>22)</sup>。

ここでもまた、あり得べき疑念として(3-c)、われわれの上の指摘に対して、スピノザとライプニッツを対として見るということは、指摘するまでもない自明性を持つものではないか、との反問が考えられる。確かにスピノザとライプニッツとは歴史的に見て相次いで登場した哲学者であって、両者が関係づけられることは至極当然であるように見える。しかし、ヤコービとメンデルスゾーンから発した汎神論論争の意義を再確認するまでもなく、それ以前の時代にあっては哲学史にスピノザの名は存在しなかった。否、むしろ、汎神論論争そのものが一つの結果であって、われわれが本稿で見たように、メンデルスゾーンの『哲学的対話』のような「大胆な」解釈が積み重ねられることで、デカルトからスピノザへ、スピノザからライプニッツへという「哲学史」が形成されることになったのである。勿論、そうなるに至った所以はある。ドイツ哲学の形成そのものがライプニッツ=ヴォルフ学派を抜きにして語ることが出来ないこと、スピノザ主義の受容は当然その上でのものであったということ<sup>23)</sup>、そして何より、この無世界論問題に現われているように、スピノザの唯一実体説とライプニッツのモノド論とは好一对のものであり得るとい事情があるからである。

(4) それゆえ、われわれはここから更に、<スピノザとライプニッツ>という対を一般化することができないか、との展望を開くことが出来る。(4-a) まずは、シェリングの『自由論』において、スピノザが登場させられるに際して、多くの、しかも重要な点でライプニッツとの関係が考慮されている<sup>24)</sup> ことからすれば、『自由論』とスピノザ主義との関係について考える際に、ライプニッツとの関係からの洗い直しが必要になるだろうという見通しが成り立つ。シェリングの対スピノザ態度は、シェリングの対ライプニッツ態度との関係があるのではないかと。(4-b) 更にこれを拡張すれば、『自由論』に限らず、シェリング最初期からのスピノザ主義との関係について考えるためにも、やはりライプニッツが呼び出されるべきではないのか、という予想ができる<sup>25)</sup>。無論そのためには、(4-c) あるいはそれとの関係において、「無世界論」問題のみならず、ドイツ哲学の形成一般と<スピノザ=ライプニッツ>関係についてある程度の規模の考察が必要になることは言うま

22) ヘーゲルの場合にも、無世界論以外の(ただし関連はある)文脈でスピノザをライプニッツとの関係において見るテキストは多数挙げられる。

23) その一端については、不十分ながら平尾 [2004a]及び [2007a]で論じた。この点を更に広範囲に見た別稿Bを用意している(脱稿済未発表)。

24) その最も重要な箇所は、やはり §34における必然性問題、§36における可能性問題にそれぞれ触れた部分であろう。

25) その内、同一哲学期については、平尾 [2004b]を参照されたい。

でもない<sup>26)</sup>。

#### 4 「スピノザ主義=無世界論」説否定の理由

以上によって、『自由論』をいわば外へと開くことは出来たとしても、この問題を巡っての最大の問題にわれわれはまだ答えていない。すなわち、スピノザ主義のライブニッツ化とも呼べるような形で、スピノザ解釈としてはやや無理のある議論であることを承知しながら、なぜシェリングは、彼の前後のほとんどすべての論者の見解に反して、スピノザ主義が無世界論ではないと主張しようとするのか。あるいは、なぜシェリングはここでいわばスピノザ擁護とも言える姿勢を採っているのか。

一つ考えられるのは、おそらくシェリングが汎神論問題を論じるにあたって念頭においていたと思われるヤコービに対する批判の意図があったのではないかと、ということである。しかし、それだけなら、ヤコービが批判対象としたスピノザを擁護してみるという感情的な議論として処理されてしまいかねない。しかし、われわれがここで取り上げたのは無世界論問題である。この問題に注目して、かつヤコービとの関係を導入すれば、一つ指摘できるのは、「神の他に何も無い」ということのヤコービ的解釈、すなわちニヒリズム問題との繋がりである<sup>27)</sup>。ヤコービは『フィヒテ宛書簡』において、フィヒテ哲学にとっては「自我が全て」であり、従って、「自我の他に何も無い」ことになる指摘し、その意味でこの哲学は、全てを無化しているのであり、従って「ニヒリズム」であるとする。しかし、同じ構造はスピノザにも当てはまる。スピノザにとっては「実体が全て」であり、「実体の他には何も無い」。従って、フィヒテを転倒した形で、スピノザ主義も同じく「ニヒリズム」であることになる。彼にとってフィヒテ哲学は「逆転したスピノザ主義」(Jacobi-W, III, 12)に他ならない。

ヤコービが、極めて乱暴な形でこのような議論を行ったのは、彼がスピノザの実体も、フィヒテ的な自我も、要するに「知」の枠内にあるものに過ぎないと考えたからである。彼にとって重要だったのは、「命がけの跳躍」によってそうした「知」の外へと逃れ出ることである。しかしシェリングは、こうした「非知」の立場に逃れようとするヤコービの姿勢を認めず、少なくとも『自由論』においては、飽くまで学知を重視する。予め「外部」

26) 上記別稿Bでは、ドイツにおけるスピノザ主義受容が、初期にはライブニッツとの関係の上でのものであり、かつ、それを保存しつつ、他の思潮との関係が次々に浮上する姿を描いている。

27) この点については、平尾 [2007b]で指摘した。

を想定するような二元論は、シェリングにとって「理性の放棄と分裂の体系」（§9, VII, 354）に他ならなかったからである。そうした学知の一つの象徴が、ヤコービにとってそうであったようにシェリングにとってもスピノザ主義であったと考えれば、ここでのスピノザ主義擁護は、シェリング自身の立場とも密接に関わりを持つことになる。スピノザにとって「神の他には何もない」のではない。スピノザは無世界論ではなく、有限性、個別性を廃棄しようとするのではない。これはスピノザ擁護であるとともに、シェリング自身の立場の弁明でもあり得る。つまり、シェリングは、ヤコービの強引で、しかも強力な議論に対抗するために、ヤコービが批判する知と、ヤコービが肯定する二元論とのいずれでもない第三の立場を模索し、ヤコービが哲学的な知、体系の典型と見なすスピノザですら、実はヤコービが見ていない可能性を持つことを示すことで、自らの立ち位置に余地を確保しようとしているのではないか。だとすれば、これは、『自由論』全体の読解にとって決定的な論点を提供することになるだろう<sup>28)</sup>。

しかし、もう一つ考えられるのは、必ずしもヤコービだけに限らず、スピノザに対する人々の態度への批判として、ということである。これは、ラインハルトのスピノザ、ライプニッツ解釈に当てつけて、今生きる者が現存しない者たちに対して持つべき鄭重さをシェリングが強調していること（VII, 343）と接続する。ただ、これは飽くまで一般論としてであって、特に無世界論問題だけに当てはまる理由ではない。また、死者への礼儀を強調しつつも、この後（§7）ではシェリング自身がスピノザを厳しく批判しているのである。しかし、われわれの理解では、無世界論に関わるスピノザ擁護と、シェリング自身の立場からするスピノザ批判とは、逆接するのではなく、むしろ連動したものである。

シェリングのスピノザ批判は、スピノザ主義が「一面的-实在論的体系」（§7, VII, 350）であるという点に収斂する。ここには二つの論点が含まれている。スピノザ主義が实在論であるという判断と、それだけでは不十分なものにすぎないという批判である。スピノザ主義は一面的なものに過ぎないが故に「スピノザの根本概念は観念論の原理によって精神化され、（一つの本質的な点で変容させられ）」（*ibd.*）ねばならない。しかしこれは、観念論の優位を主張してはいても、それにとどまるものではない。返す刀でシェリングは、フィヒテに代表される観念論の不十分さを暴く。シェリング自身が目指すのは、単なる实在論でも純粋な観念論でもなく、实在論と観念論の統合である（§10）。しかし、そのためには、そこで総合されるべき一方の極を、すなわち「一面的-实在論」を、スピノザが引き受けてくれなければならない。シェリングにとってスピノザ主義は、实在論である必要がある

---

28) この点については、改めて論じる予定である。

のである。

ところが、既にマイモンで見たように、スピノザ主義を無世界論と見なすなら、スピノザ主義は自然の内実を成す有限な個物の世界を単なる現象として、つまり消極的な意味で観念的なものとしていることになり、実在的なものと見なしていないことになる。だとすれば、これはシェリングにとってどうしても消しておかなければならない解釈である。シェリングにとってスピノザ主義は、実在論でなければならず、そのためには無世界論であってはならないのである。念のために言えばわれわれは、シェリングがここでマイモンの議論を念頭においているとか、従来の「スピノザ主義=無世界論」説を批判対象として自覚していると主張したいのではない。そう主張できれば話は早いですが、それは確言できるものではない。むしろ、シェリングにとってスピノザ主義が、無世界論でなく、したがってまた観念論ではなく、かえって極端な実在論であることは、『自由論』の内的要請であったことそのものを重視したい。そうであってこそ、シェリングは自らの立場を十分に確保することができるからである。

こうしてシェリングは、無世界論問題を巡って、一方でヤコービの二元論、非知の立場に対するため、世界という内実を持ったスピノザ主義を立て、それに寄り添うことで『自由論』の基本的な姿勢を明らかにし、他方で無世界論としての観念論的なスピノザ解釈を退け、実在論的スピノザ解釈を表に立てながらそれを更に超えて行くという、『自由論』が目指す立場を積極的に提示しているのである。

このように、一見迂回に見える無世界論問題の歴史的背景を探る準備を経ることによってわれわれは、『自由論』をスピノザ主義の歴史に向けて、外へと開く視点を得るばかりではなく、『自由論』にとってのスピノザ主義の意味についても、一定の手がかりを得たことになる。だが、シェリングが目指すリアル-イデアリズムにおけるスピノザの役割について考えるには、また別の準備が必要である。その準備の必要性は、『自由論』の思想が思想史に還元されることを意味するのではなく、むしろ、この著作が備える思想史的厚み、豊かさの証である。

### 一次文献

シェリングのテキストからの引用の出典指示は、慣例により以下の全集に従う。

◎F. W. J. Schelling sämtliche Werke, hrsg. von .K. F.A. Schelling, 1856-61 [SW]

『自由論』のテキストとしては、基本的には次に掲げる版に依拠する。

◎F. W. J. Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit, hrsg. mit Einl. und

Anm. von T. Buchheim, 1997, Felix Meiner, Ph. B.[Buchheim]

『自由論』邦訳は、次のものを参照し、各々特徴のある訳注に裨益されるところが大きかった。

◎西谷啓治訳『人間的自由の本質』岩波文庫、1951年。

◎渡邊二郎訳『人間的自由の本質』中央公論社「中公バックス・世界の名著43」、1980年。

なお、『自由論』からの出典指示は、[SW]の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）の外、各種刊本・翻訳との照合を容易にするために、段落番号を添えた（§.で示す）。この番号は、渡邊訳で段落の冒頭に示されており、研究者のなかにも利用者がある。

シェリング以外の一次文献として使用したものは、次の通り。

◎Fichte, Johann Gottlieb, Werke Hg. von Fichte, Immanuel Hermann, 1834-35.[Fichte-W]

◎Fichte, Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Hg., Lauth Reihard und Jacob, Hans, Frommann, 1964-.[Fichte-GA]

◎Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Theorie-Werkausgabe, Hg. von Moldenhauer, E. und Michel, K. M. , 1969-71, Suhrkamp.[Hegel-W]

◎Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Gesammelte Werke, herausgegeben im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1968-, Felix Meiner.[Hegel-GW]

◎Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, Hg. von Garniron, Piere und Jaeschke, Walter, 1986-1996, Felix Meiner (Vorlesungen. ausgewählte Nachschriften Manuskripte, Bd. IX) .[Hegel-V, Bd. IX]

◎ヘーゲル（藤田健治訳）『哲学史』下巻の二、岩波書店「ヘーゲル全集」14b巻、1956年.[藤田訳]

◎Jacobi, Friedrich Heinrich, Werke, Hg. von Friedrich Roth u. Friedrich Köppen, 1812-25.[Jacobi-W]

◎Maimon, Salomon, Gesammelte Werke, Hg. von Verra, Valerio, 1965, Olms.[Maimon-W]

◎サロモン・マイモン（小林登訳）『放浪哲学者の生涯——サロモン・マイモン自伝』筑摩書房、1951年 [小林訳]

◎Mendelssohn, Moses, Gesammelte Schriften Jubiläumsausgabe, 1971-1974, Friedrich Frommann.[Mendelssohn-S]

◎Platner, Ernst, Philosophische Aphorismen, 1776[Platner[1776]]

◎Platner, Ernst, Philosophische Aphorismen, 6te., 2 Bde., 1970, Culture et civilisation, ND. der 1793-1800 Ausgabe (Aetas Kantiana, Bd. 203) .[Platner[1793]]

◎Spinoza Opera, im Auftrag heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl

Gebhardt, 1925.[Spinoza-O]

## 二次文献

- ◎Atlas, Samuel[1959], Solomon Maimon and Spinoza, in: Hebrew Union College Annual, 30.
- ◎Buchheim, Thomas[1997], Einleitung und Anmerkungen, in: Schellings Freiheitsschrift der Ph. B. Ausgabe.
- ◎Heidegger, Martin[1971], Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809), Hg. von Feick, Hildegard, Max Niemeyer=ハイデガー, マルティン (木田元・迫田健一訳) [1999] 『シェリング講義』新書館.
- ◎Helfferich, Adolph[1849], Spinoza und Leibniz, oder, Das Wesen des Idealismus und des Realismus, Friedrich und Andreas Perthes.
- ◎平尾昌宏[2004a] 「啓蒙期ドイツのスピノザ主義——ヴォルフ-ランゲ論争から——」スピノザ協会『スピノザーナ』5号.
- ◎平尾昌宏[2004b] 「形式・体系・自然——シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』——」松山寿一, 加国尚志(編) [2004] 『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房「シェリング論集4」, 所収.
- ◎平尾昌宏[2006] 「自由における対話——シェリング『自由論』を読むために——」『立命館文学』595号.
- ◎平尾昌宏[2007a] 「ドイツにおけるスピノザ主義の基本構図——後期啓蒙から汎神論論争まで——」『大阪産業大学論集』人文科学編, 121号.
- ◎平尾昌宏[2007b] 「スピノザを巡るシェリングとヤコービとの対話——『自由論』序論部の読解——」『スピノザーナ』8号.
- ◎渡邊二郎[1980], 訳注, シェリング『自由論』世界の名著版.